

育児ストレスに関する父母間の比較分析

分担研究者 大日向 雅美
(恵泉女学園大学人文学部教授)

研究要旨 乳幼児期の子どもをもつ父親(117名)と母親(168名)を対象として、子どもに対する感情や子育て観、育児ストレスの実態を把握するために調査票調査を実施した。

その結果、父親の育児に対する関心はけっして低くはないことがみられた。自分自身が父親であることについての肯定感や、家族思いの良い父でありたいとする意識はかなり強い結果が示された。その反面、育児は本来的には母親のものであるとして、第三者的な意識も根強いことが示されている。したがって、子どものことで不安があると回答している父親も、それが必ずしも育児ストレスとなつては現れていない。一方、母親も母親としての充実感や責任感を強くもっているものの、育児に追われる日常の苛立ち、父親に比べて強い結果が示されている。とりわけ子どものことで不安があるとする母親にその傾向が顕著であった。

父親が育児に一応関心を高めつつも、それがストレスとはなっていない現状は、父親の育児参加が実際はまだそれほど進んでいないことの現れではないかと考えられる。母親の育児負担を軽減するためにも、父親のいっそうの育児参加の推進が求められるところである。しかし、父親が母親と同様に育児に密着し、ストレスを高める結果を招くことがあってはならないであろう。本調査対象が示した親であることへの肯定感や責任感を維持しつつも、それが育児ストレスとはならないような親の育児のあり方、そして、親に対する育児支援のあり方を模索する必要性は、今後、父親の育児参加を推進するうえでも求められていることは、母親に対する育児支援と同様であることを指摘したい。

■ 研究目的

近年、育児に対するストレスや嫌悪感を強める母親の増加現象が注目される。そうした母親の育児ストレスの背景をさぐると、母親の育児負担がいかに大きいか明らかである(参考:大日向雅美1995、1999)。母親の育児負担の軽減のためにも父親の育児参加が求められるところであるが、果たして父親には育児ストレスはないのだろうか。本研究は父親の育児ストレスの程度は母親とどのような違いがあるのか、また相違があるとすればその理由は何かを明らかにすることを目的とするものである。育児に参加する父親も漸増傾向にある昨今であり、父母の心身の安定は乳幼児の情緒の安定にとって重要な課題であると考えられる。育児に悩む親に対する支援のあり方を検討するためにも、父母の育児ストレスの現状を把握し、その背景要因に関する分析を行うことを目的とした。

■ 研究方法

乳幼児期の子どもをもつ父親と母親を対象として、子どもに対する感情や子育て観、育児ストレスの実態を把握するために調査票調査を実施した。

調査対象は末子の年齢が3歳未満の子どもをもつ父母とした。居住地域は東京都内・都下及び千葉県である。

調査内容は主に次の4点から成る。

- 1) 調査対象に関する基礎的事項
- 2) 子どもや育児に関するストレス
- 3) 親役割に関する認識
- 4) 夫婦関係に関する認識

調査時期は1998年9月～11月である。

■ 研究結果

1. 調査対象

有効回答数

父親:117名(回収率52.0%)

母親:168名(回収率74.7%)

平均年齢

父親：33.3 歳

母親：30.6 歳

最終学歴

父親：高校 25.6%

専門学校・短大 8.5%

大学・大学院 59.0%

母親：高校 28.6%

専門学校・短大 48.2%

大学・大学院 18.5%

母親の職業

無職 79.8% 常勤 10.7% パート等 5.4%

2. 育児に対する意識とストレス

①父母間で共通した傾向

子どもや育児に関する意識を尋ねた項目（表1）のうち、父母ともに高い評定値を示したものは、「母親（父親）であることが好きである」「母親（父親）になったことで人間的に成長できた」「母親（父親）であることに充実感を感じる」「育児はやり直しができないから責任重大だ」である。次いで「将来子どもがいじめにあわないか心配だ」「将来子どもが非行に走らないか心配だ」といった子どもの育ち方に対する不安、あるいは「自然破壊が心配だ」という育児環境や、「この先、自分の仕事が上

表1 親役割意識・子育て観と育児ストレス

	母親	父親	有意差
母親（父親）であることが好きである	3.464	3.547	
母親（父親）になったことで人間的に成長できた	3.731	3.197	***
母親（父親）であることに生き甲斐を感じている	2.677	2.376	*
母親（父親）であることに充実感を感じる	3.24	3.128	
育児はやり直しができないから責任重大だ	3.208	3.078	
子どもを育てることが負担に感じられる	1.946	1.724	*
自分は母親（父親）に向いていない	1.934	1.595	***
母親（父親）であるために自分の行動が制限されている	2.935	2.316	***
女性が生まれながらに母性を備えている	3.072	3.296	*
母親の方が父親よりも育児が上手い	2.536	3.103	***
私は良い母（父）と思われたい	2.452	3.427	***
出世よりも家族や子どもの方が大事だ		3.351	
子どもが可愛く思えない	1.119	1.129	
この子を生まなければ（持たなければ）良かった	1.066	1.172	
子どもに対してかわいそうなことをしてしまったと落ち込むことがある	2.413	2.197	
子どもをどうしついたらいいか、わからなくなることがある	2.607	2.457	
育児はもっと楽しいはずだ	2.435	2.133	
育児に対する親戚や近所の干渉が気になる	1.91	1.59	**
子どもに振り回されているような気がする	2.425	1.94	***
イライラして子どもを怒鳴ってしまう	2.353	2.06	*
イライラして子どもに手をあげてしまう	1.868	1.664	
自分は母親（父親）には向いていない	1.934	1.595	***
うんちのついたおむつを替えるのは嫌だ	1.119	1.752	***
子どもは理屈が通じないので、相手にするのがとても疲れる	1.94	1.835	
将来、子どもが非行に走らないか心配だ	2.613	2.362	
将来子どもがいじめにあわないか心配だ	3.048	2.581	***
自然破壊（環境ホルモン・地球温暖化）が心配だ	3.202	2.915	*
不況がつづくことが不安だ	2.19		
この先、自分の仕事が上手く行くか心配だ		2.81	

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

手く行くか心配だ」(父親)「不況がつづくことが心配だ」(母親)といった経済生活への不安に対して高い評定値を示している点は父母間で共通である。

②父母間で相違が認められる項目

父親は「私は良い父と思われたい」「出世よりも家族や子どものほうが大事だ」と、家族や育児に熱い思いを示す項目への評定値が高い。しかし、母親は「私は良い母と思われたい」という項目への評定値は必ずしも高くない。

一方、「子どもに振り回されているような気がする」「イライラして子どもを怒鳴ってしまう」「子どもを育てることが負担に感じられる」「母親(父親)であるために自分の行動がかなり制限される」「私は母親(父親)に向いていない」など、育児に翻弄され、苛立ちを示したり、育児に自信を喪失している様子を示す項目への評定値は母親の方が高い。同様に「育児はもっと楽しいはずだ」という思いも母親の方が有意に強いことが示されている。

③親役割意識の違い

父母ともに親であることを高く評価し、育児に強い責任感を覚えている点では共通であるが、育児や子どもに対する不安や苛立ちは母親の方が父親よりも強いという結果が得られたことは上記の通りである。その理由として、育児に関与している程度および親役割意識の相違が考えられる。本調査対象の母親は79.8%は専業主婦であり、平日は育児の大半を母親が担っていると考えられる。

さらに親役割に関して「母親の方が父親よりも育児が上手い」「女性は生まれながらに母性を備えている」として、育児を母親の役割だとする意識は母親よりも父親に強い。一方、「母親(父親)になったことで人間的に成長できた」「母親(父親)としてふるまっているときが、いちばん自分らしい」など、親としての自己を肯定している程度は母親の方が有意に強い。

また子どもについて不安や心配事の有無と育児ストレスとの関連をみた結果、「子どもを育てることが負担に感じられる」に対する評定値は不安有り群の方が有意に高いことは父母ともに共通である。

しかし、不安有り群の母親はそれ以外にも、「子どもをどうしつけたらいいか分からなくなることがある」「子どもがよく痲癩を起こすので頭にくる」「イライラして子どもを怒鳴ってしまう」「イライラして子どもに手をあげてしまう」など育児や子どもに対する苛立ち、あるいは「親戚や近所の干

渉が気になる」「子育てはやり直しができないから責任重大だ」「子どもが将来非行に走らないか心配だ」「子どもが将来いじめにあわないか心配だ」など、親としての責任や不安が有意に強い結果が示された。

一方、父親は上記の1項目以外は、不安有り群と不安無し群との間に、育児ストレスに関して有意差は見られない。

■ 結果の考察

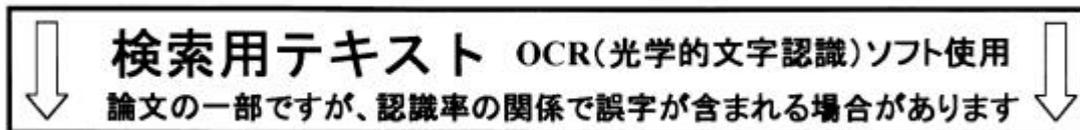
昨今は育児に対する父親の関心を高めようとする動きが各方面で活発化している。「育児をしない男を父とは呼ばない」というキャッチコピーを掲げて厚生省が作成したポスターが話題を呼んでいる。そうした動向を背景としてか、父親の育児に対する関心は決して低くはないようである。乳幼児をもつ本調査対象の父親も、自分自身が父親であることについての肯定感や、家族思いの良い父でありたいとする意識はかなり強い結果が示されている。その反面、育児は本来的には母親のものであるとして、第三者的な意識も根強いことが示されている。したがって、子どものことで不安があると回答している父親も、それが必ずしも育児ストレスとなつては現れていない。一方、母親も母親としての充実感や責任感を強くもってはいるものの、育児に追われる日常の苛立ちは、父親に比べて強い結果が示されている。とりわけ子どものことで不安があるとする母親にその傾向が顕著であった。

父親が育児に一応関心を高めつつも、それがストレスとはなっていない現状は、父親の育児参加が実際はまだそれほど進んでいないことの現れではないかと考えられる。母親の育児負担を軽減するためにも、父親のいっそうの育児参加の推進が求められるところである。しかし、父親が母親と同様に育児に密着し、ストレスを高める結果を招くことがあってはならないであろう。本調査対象が示した親であることへの肯定感や責任感を維持しつつも、それが育児ストレスとはならないような親の育児のあり方、そして、親に対する育児支援のあり方を模索する必要性は、今後、父親の育児参加を推進するうえでも求められていることは、母親に対する育児支援と同様であるといえよう。

(付記：本調査の実施にあたって、恵泉女学園大学4年水野圭子の協力を得た)

参考文献

- 1)大日向雅美「最近の子どもを愛せない母親」の研究からみえてくるもの：主として心理学における母性研究の立場から 家族研究年報 No.20、20～31、1995
- 2)大日向雅美『子育てと出会うとき』NHKブックス、1999



研究要旨 乳幼児期の子どもをもつ父親(117名)と母親(168名)を対象として、子どもに対する感情や子育て観、育児ストレスの実態を把握するために調査票調査を実施した。

その結果、父親の育児に対する関心は決して低くはないことがみられた。自分自身が父親であることについての肯定感や、家族思いの良い父でありたいとする意識はかなり強い結果が示された。その反面、育児は本来的には母親のものであるとして、第三者的な意識も根強いことが示されている。したがって、子どものことで不安があると回答している父親も、それが必ずしも育児ストレスとなつては現れていない。一方、母親も母親としての充実感や責任感を強くもっているものの、育児に追われる日常の苛立ちは、父親に比べて強い結果が示されている。とりわけ子どものことで不安があるとする母親にその傾向が顕著であった。

父親が育児に一応関心を高めつつも、それがストレスとはなっていない現状は、父親の育児参加が実際はまだそれほど進んでいないことの現れではないかと考えられる。母親の育児負担を軽減するためにも、父親のいっそうの育児参加の推進が求められるところである。しかし、父親が母親と同様に育児に密着し、ストレスを高める結果を招くことがあってはならないであろう。本調査対象が示した親であることへの肯定感や責任感を維持しつつも、それが育児ストレスとはならないような親の育児のあり方、そして、親に対する育児支援のあり方を模索する必要性は、今後、父親の育児参加を推進するうえでも求められていることは、母親に対する育児支援と同様であることを指摘したい。